国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（三）

松本麻子

【解説】

国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』は、次のような三八の連歌百韻を集め書写した書である。

○① 文禄二年五月何木百韻
○② 文禄二年五月六日何路百韻
○③ 文禄二年五月廿七日白何百韻
○④ 文禄二年正月十日何人百韻
○⑤ 文禄二年正月十四日山何百韻
○⑥ 文禄二年正月十八日何人百韻
○⑦ 文禄二年二月十二日何人百韻
○⑧ 文禄二年二月十八日何人百韻
○⑨ 文禄二年五月十六日何路百韻
○⑩ 文禄二年五月廿日何人百韻
⑪ 天文十八年三月廿四日於大覚寺殿何人四吟
⑫ 天文十三年卯月六日追善両吟
○⑬ 弘治五年八月十一日何船四吟
○⑭ 元亀四年六月六日何人両吟
○⑮ 永禄七年正月廿二日懐旧両吟
⑯ 永禄五年八月十一日何人両吟
○⑰ 弘治二年三月廿四日於江州永原築前守重与興行何路両吟
⑱ 永禄五年十二月九日於飯盛城何船両吟
⑲ 永禄五年三月七日何船独吟
⑳ 何人三吟（安宅冬康・三好長慶・宗養）
㉑ 何人独吟（宗牧）
○㉒ 永禄六年仲冬十八日於相模小田原氏康館宗養懐旧独吟
㉓ 天文廿一年七月廿六日阿蘇山長善坊契雅興行山何百韻
○㉔ 永禄八年八月廿二日筑後大鳥井正佐房信芸興行何木百韻
○㉕ 天正三年三月八日蜂屋兵庫助頼隆興行何船百韻
○㉖ 天正三年二月廿日於嵯峨大覚寺殿何人百韻
○㉗ 天正三年二月二日美濃国住西松安親入道興行山何百韻
○㉘ 天正二年五月八日水野監物丞守隆興行山何百韻
○㉙ 天正二年六月十日於近江石山世尊院景恵山岡対馬守景雅興行初何百韻
○㉚ 天正二年六月十一日於江州石山何人百韻

○㉛　天正三年正月七日於昌叱何木百韻
◎㉜　天正四年八月十九日肥後国甲斐左京入道宗柳興行
◎㉝　永禄九年閏八月十八日肥後天草住妙楽寺秀舜興行何路
◎㉞　元亀三年九月廿八日於醍醐山舜静院谷無量寿院興行何人
◎㉟　元亀三年三月十八日於吉野山松室別当何船
◎㊱　元亀二年八月六日肥後御舟林中務少輔興行山何
◎㊲　元亀三年七月十三日何人
㊳　慈音院前天台座主二品堯然親王御追善独吟

題簽には「寄合連歌」とあり、『百韻連歌集』は整理書名であろう。これらの百韻は、宗養・紹巴時代の連歌を中心としたもので、特に紹巴の参加した百韻は未翻刻のものが多い。紹巴の参加していない宗養の百韻⑪・⑫・⑯・⑱・⑲・⑳・㉓については、斎藤義光『宗養連歌百韻撰』（一九八九年、私家版）に翻刻が掲載されている。大部な資料であるため、今回は（三）とし、◎印で示した㉜～㊲の紹巴が参加した百韻を翻刻しここに掲載する。○印で示した①～⑩、⑬～⑮、⑰、㉒、㉔～㉛の百韻は「国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（一）（二）」（「医療創生大学研究紀要　人文学・社会科学・情報学篇」第五号、二〇二〇年二月・「医療創生大学大学院人文学研究科紀要」第一七号、二〇二〇年三月）に掲載した。

なお、翻刻に際し、仮名遣いと踊り字は底本のママに、異体字・旧字は新字に改めた。虫損や汚れ等で判読不明の箇所は□で示した。また、難読字と思われるものにはルビを付し、（　）の中にふりがなを入れた。

【書誌】

国立公文書館内閣文庫蔵本。所蔵者整理書名『百韻連歌集』。題簽に「寄合連歌」とある。函番、二〇二一二五二。写本一冊。内題ナシ。表紙は、藍色無地。本文楮紙。寸法、縦一二・八糎×横二〇・〇糎。本文、墨付一六四丁、一面一三行書、一句一行。遊紙、前後ともにナシ。奥書ナシ。

【翻刻】

㉜　天正四年八月十九日　肥後国甲斐左京入道宗柳興行

1　分ゆかは跡も忘れん花野哉　紹巴
2　虫の啼ねにさそはるゝ袖　宗柳
3　月に成閨の樞（とぼそ）はさしやらて　心前
4　やゝ涼しさのかよふさよ風　昌叱
5　むら雨や竹のはつたひ過ぬらん　通豊
6　けふりのうちにつゝく河水　宗及
7　山もとの道より遠に橋みえて　兼如
8　田つらのむらや人帰るらん　正磐
9　方々に打さはき行鳥のこゑ　既在
10　はやしかくれに風渡る也　永重
11　露やたゝ置あへすしもこほるらん　之継
12　秋の時雨はふる程そなき　巴
13　山のはに月の光のほのめきて　柳

14 しはしはかりのよひのいなつま　前
15 端近くならす箔（すだれ）もおろしこめ　叱
16 宮ゐのうちそ人け稀なる　豊
17 忍ひつゝ待もやよそにしらるらし　磐
18 袖の泪もふかき夕昏　如
19 憂はたゝ旅の日数を重ねきて　及
20 山より山のかきりわかれぬ　在
21 一木さへ哀をしたふ春の花　重
22 そのふを近みうくひすの啼　継
23 かすむよは明るもしらぬ枕して　巴
24 雨しつかなるともし火のもと　叱
25 品々の人の心を定かね　前
26 返しもあらぬ文はいく度　柳
27 難面にまけてやまんはさすかにて　如
28 あはするに又をろかなる歌　及
29 こと更におなししらへやかへぬらん　継
30 月にむかひてふかす夜の空　重
31 白菊に重る霜を打はらひ　在
32 箔（まがき）の薄風にみたるゝ　豊
33 住ふるすやとには誰かとひもこん　磐
34 やもめなからのとしもへにけり　巴
35 やつるゝも哀かたみのから衣　叱
36 都へたてゝ行旅の袖　前
37 わひしきは独二人の道のすゑ　重

38 ふむ跡よりもふりうつむ雪　継
39 落草の鳥立わかれす暮初て　巴
40 秋のあらしにおしむのゝ色　叱
41 みる〳〵も霧にかくろふさかの山　前
42 入方になる月のさひしさ　如
43 あかすしも酌さかつきに円居して　柳
44 をこたりやすき法そはかなき　在
45 齢たけ起臥つらき朝夕に　及
46 おなし住ゐをおやさけし中　巴
47 あやなくも長き思ひの添やせん　豊
48 松をしるしにうへ残すかけ　磐
49 浅茅生となれは花咲枝朽て　叱
50 露をやとりにこてふねぬめり　前
51 明けほのゝ霞に風や絶けらし　如
52 さしならへ行あまのつり舟　重
53 山きはの細江の水も海に出て　巴
54 引汐遠きま砂ちの末　柳
55 下ゐるも翅やかはす天つ雁　前
56 いなはの露に月澄る暮　叱
57 草ふきの雫身にしむ雨晴て　継
58 あらき野風は砌まてこそ　及
59 かり衣立帰りてもうき心　豊
60 鏡にさへもおもかはりせり　前
61 いはけなきたはふれことも何ならて　叱

62 あたし行ゑを猶こふるのみ　巴
63 うらうへのなからましかは頼まゝし　在
64 中立に先もらすことのは　磐
65 恨たゝをしこめつゝもなく涙　及
66 うけひかぬまのいさめかなしき　叱
67 子にもはた年ふりぬれは随て　前
68 明石も跡にたち別つゝ　如
69 夕霧に友まとはすや浦衛　巴
70 苫屋の月のまた出ぬころ　豊
71 しはしはと打やまとろむ麻衣　継
72 樵夫も休む花のしたかけ　前
73 雲霞山を遙に分々て　重
74 野はちるきゆる雪の半天（り歟）　巴
75 吹と吹風より後の朝附日　磐
76 流の魚のうかひ出ぬる　在
77 岩ね行波に水草の方よりて　継
78 流るあさせの跡とむる袖　叱
79 五月雨も限のあれは晴けらし　前
80 雲よりうへの冨士の白雪　及
81 大ひえや超て（こへか）都の秋の月　巴
82 夜さむになれは山そ住うき　継
83 鹿のねをすゝ吹風に聞添て　叱
84 さひしき色や木葉ちる暮　巴
85 やとりをもこなたかなたに立うかれ　豊

86 人たかへするわか身かなしも　重
87 ぬきすへしをける衣もなつかしみ　柳
88 明はなれても床のかたはら　前
89 冬枯の芝生によりて鳴うつら　巴
90 ふりそふ霜のいくへなるらん　如
91 泪さへ猶落かみに乱れ合　叱
92 哀いまはの筆の跡なき　磐
93 いつくにかつたへ残せる道ならん　継
94 かた山きしも桟のすゑ　巴
95 雲とのみまかひし花を求きて　柳
96 松に藤さく陰の木高さ　叱
97 春なから鳴出けりな時鳥　如
98 そゝき捨たるあまり音する　在
99 かたふける板屋の軒はまはらにて　及
100 かきほに近き竹のすゑ〳〵　虎松

紹巴　十四　兼如　八
宗柳　八　正磐　七
心前　十二　既在　七
昌叱　十三　永重　七
通豊　七　之継　八
宗及　八　虎松　一

㉝ 永禄九年閏八月十八日　肥後天草住妙楽寺秀舜興行

何路

1 朝霧に松風おもきひゝき哉　紹巴
2 梢をつたふあきの山水　秀舜
3 河上の月の夜寒を鴛鳴て　弥阿上人
4 床は旅ねのさめやすき空　清誉
5 問よりも出ぬ斗の宿毎に　玄哉
6 夕々のかねのはるけさ　心前
7 霜や猶あらしの末にまよふらん　能哲
8 木の間の峰の冬枯の色　英怙
9 幽にも鳥のこゑする入日影　道成
10 舟さし帰る波の一かた　宗仍
11 半天はたゝよふ雲に雨みえて　長知
12 袂涼しき夕昏の露　康清
13 待としもなくてや月の出ぬらん　文阿
14 こすのまかひにかよふ稲妻　巴
15 ほのめかす風冷しき音添て　舜
16 色付らしも小山田の原　阿
17 今をわか折しら雲の初雁に　誉
18 おもふ都となかめやる暮　哉
19 隠家をとはるゝ程はなくさめて　前
20 此比つもる雪のした道　成
21 ちる花に野への草はも浅緑　怙
22 梅かゝになる水の方々　哲
23 谷河の氷いくせに流るらん　仍
24 外山にうつる朝日閑けし　知
25 夜雨みるか内より晴初て　清
26 何をさはりに問もこさらん　誉
27 哀とやさけしもゆるす親心　巴
28 緑の袖もたゝしはしこそ　前
29 霜払草の枕の明離　阿
30 分つゝゆかん野ちの篠原　舜
31 遠くなる鈴をさしはの音す也　哉
32 片山陰のふかき夕霧　怙
33 月代もそれとはかりの峰高み　哲
34 漸はた近し秋のはの色　巴
35 蝉の羽のうすき衣に風立て　成
36 くるしむ思ひいかにつゝまん　阿
37 文はたゝ筆限ある心しれ　前
38 とりなすにこそけはひよからめ　哉
39 つかへこし人をそ頼む新参　巴
40 道はそこともわかぬ神かき　仍
41 杉むらも松もひとつの雪折に　阿
42 ねくらさためぬ月のよ鴉　舜
43 秋風もふくろふの鳴日は暮て　誉
44 霧にさひしき故宮の庭　哲
45 爰かしこ雫落そふ岩伝　知

46 すゑ〳〵も猶水の萍　清
47 咲かくす柳は花の白波に　巴
48 みたるゝ玉や春雨の露　怙
49 跡はたゝこてふをもとの主にて　誉
50 うき住ゐとや帰る鳥のね　前
51 ともなふも語残して明るよに　哲
52 おも影したふ夢のあやなさ　知
53 袖のかの消ぬ限をすさひにて　舜
54 さりしをいへは遠き法師（のりのし）　阿
55 行ひもたゝ一夏の住所　怙
56 汲たえぬとや水さひゐにけり　巴
57 しほかまはいつの都の跡ならん　仍
58 かたふきなから松の木高さ　前
59 山の端にみる〳〵月は明初て　哉
60 また秋きてもよはのみしかさ　誉
61 さ衣や取出てうちも重まし　巴
62 露より霜の置まさる暮　成
63 啼もたゝよはく成行虫のこゑ　阿
64 冬のゝ薄風も待あへぬ　哉
65 山もとの畑焼煙むすほゝれ　誉
66 春の雨まや程なかるらん　巴
67 時鳥きゝしにもせん弥生□□　哲
68 影のとかなる月のあかつき　怙
69 人は皆とまらぬ花にやとかりて　前
70 さめてそ酔のなさけをはしる　哉
71 はけしくも山下風の吹送り　舜
72 遠方になる一むらの雲　阿
73 しつか住前田のいなは刈渡し　巴
74 うかふ小舟は秋の河波　哲
75 こよひをや星の契も頼らし　誉
76 待ふかしたる袖の露けさ　仍
77 うかるゝも忍かねての閨のとに　前
78 往来にならす笛竹のこゑ　成
79 鹿子住山はしけみのおくふかみ　阿
80 わかはや秋のもみちともみん　前
81 五月雨も時雨めきつゝ晴曇　怙
82 雪より出る冨士河の水　巴
83 冴渡る野風もたゆむ日の光　哲
84 しはしは虫そ簑をはなれし　誉
85 うら枯のま菅むら〳〵方寄て　舜
86 根も臥柳ちり残るみゆ　阿
87 古跡は霧の笹（まがき）のたえ〳〵に　清
88 月影さひし遣水のすゑ　知
89 明ぬやと水鶏鳴よはさそはれて　仍
90 くるゝ程ときすきて行こゑ　哉
91 いく度かうたふ樵夫の休むらん　巴
92 重なる方の岩高き道　怙
93 幽なるいらかも雲にあらはれて　前

94 吹立けりな木からしの山　仍
95 かはりぬる空の気色の色々に　成
96 浪なれてこそ舟も出らめ　阿
97 名残しも猶あさつまのうらかなし　成
98 ふれし契もかり初の袖　巴
99 花に今日知もしらぬもいさなひて　誉
100 さけはさくらに千鳥百鳥　哲

紹巴　十三　能哲　九
秀舜　七　英怙　八
弥阿上人　十一　道成　六
清誉　十　宗仍　七
玄哉　十　長知　五
心前　九　康清　四

文阿　一

㉞ 元亀三壬申年九月廿八日　於醍醐山舜静院谷無量寿院興行

何人

1 とめゆけは紅葉の中の山路哉　紹巴
2 甍は岑の秋霧の空　藤英
3 桟に月待袖のつらなりて　藤孝
4 滝つ流の水の涼しさ　雅敦朝臣
5 せのこゑに残して雨や過ぬらん　昌叱
6 舟引のほる跡はるか也　心前
7 かへりみる道の一むら打かすみ　亮淳
8 誰かき根とかにほふ梅かえ　深増
9 こすのとに春の朝風音信て　玉暹
10 枕をちかみうくひすの啼　重然
11 閑なる月に覚行夢はおし　快典
12 長夜をしも起出る袖　等喜
13 諸ともにつらき恨をみにしめて　文閑
14 いひさけぬると後にこそしれ　巴
15 打とけし気色斗ははかなしや　英
16 たかたはつけし人の黒かみ　孝
17 いはけなきもおもふにかよふゆかりにて　敦
18 あらましかはとしのふ世中　叱
19 うへをける花の木陰も浅ちふに　前
20 あたになしつゝ過す春の日　淳
21 うらゝなる折しも釣や忘るらん　増
22 霞の絶間つなく江の舟　暹
23 明渡るきし根の竹の打なひき　然
24 残る蛍の影かすかなり　典
25 月代も空澄ぬへき秋風に　巴
26 時雨てとをる山のはの色　英
27 一村の霧の上なる雲消て　孝
28 啼かはしつゝ行夕鴉　前
29 冬枯の木間をもりの日を薄み　叱
30 かたへは白き草村の露　敦

31 取運ふま柴の庵の道みえて　暹
32 なかるゝ跡の浜川のつら　巴
33 水かさもやそゝくあまりにまさるらん　前
34 いき出ぬるもあやしおも影　孝
35 物のけの祈のしるし顕れて　巴
36 つゐにやつせる墨染の袖　叱
37 憂ことのひとつふたつはたへし世に　孝
38 としへて御子の手を開けり　巴
39 位たゝをのつからある教にて　淳
40 光は四方に出るよの月　暹
41 むさし野や山はいつくの秋の雲　前
42 お花吹立風のすゑ〳〵　然
43 はし鷹のけしきもあらき中空に　叱
44 翁さひたることのはもうし　典
45 問よるに其上遠く宮古て　敦
46 更渡りぬるいと竹のこゑ　英
47 みしかよをおしめる春の盃に　巴
48 花にあるしもやとりかる友　叱
49 雨ふれは山桜戸に立添て　孝
50 ほとゝきすかのけさの明更（あけぼの）　前
51 別行跡の心はおほつかな　暹
52 誰に契を又かはすらん　巴
53 一筆の文の返しの名もしらす　敦
54 つたへをのみに頼をく中　孝

55 ゆるすこそ賢き法の衣箱　叱
56 むなしきをとふ日はめくりきぬ　典
57 帰る間も程ふる旅にやとは荒て　前
58 蓬葎にわかれたる道　然
59 いつまてか結ひよりけん水ならん　増
60 あつさ残らぬ秋の山陰　英
61 蜩の鳴より蝉のこゑたえて　巴
62 梢の月や夜をいそくらん　叱
63 松のはもさなから雪の白妙に　典
64 あらしの後の砌しつけし　敦
65 市人の帰りつくせる里暮て　孝
66 しはしはかりの酔のかたらひ　前
67 こてふ飛翅の露のもろき野に　叱
68 わか緑なる草そみたるゝ　巴
69 咲ちるをいつかはみまし春の花　孝
70 水のまに〳〵石はしる波　暹
71 汲もたゝ網を洩ぬる鰻（うお）ならし　敦
72 度々舟をさしとめて行　孝
73 そことしもあらす聞ゆる鐘のこゑ　然
74 あらためつゝもすめる古寺　典
75 忘られぬ名残もうちの跡とひて　巴
76 鹿の鳴ねに山こゆる道　叱
77 明終ぬ月をも霧の立隔　前
78 露の雫にまかふ村雨　増

79 呉竹のすゑは吹しく風を荒み　英
80 高きつゝみも浸す河波　前
81 湊田や汐のみち入方ならし　典
82 くるれは近く衛啼よる　巴
83 芦垣の隔はかりの霜さえて　叱
84 冬まて残るきくの一もと　孝
85 仙人や深き陰にしこもるらん　然
86 行ゑも遠し爪木こる道　敦
87 跡は猶をくるゝ馬に鞭うちて　前
88 心のいさむ旅にこそあれ　淳
89 春はたゝ花より花の下臥に　巴
90 よな〳〵むすふ夢の長閑さ　（英）
91 雁かねや有明の月にかすむらん　敦
92 山もなみまのうらの遠方　叱
93 打渡す空は南の海晴て　前
94 絶ぬあらしや時雨也けん　巴
95 いく秋をふるのゝ杉の色深み　叱
96 小篠分いれは冷しき袖　暹
97 草ふきのあたりはまかふ夕霧に　敦
98 まくらかりねそ定かねたる　典
99 恨わひまたしとするもさすかにて　孝
100 頼む戸口やさしもかためぬ　然

紹巴　十四　亮淳　四
三潤大和守 藤英　七　深増　四
藤孝　十二　重然　七
雅敦　十　快典　八
昌叱　十三　等喜　一
心前　十二　文閑　一

㉟ 元亀三年三月十八日　於吉野山松室別当

何船

1 むさし野も終あらむ花をよしの山　紹巴
2 霞につゝく道の春草　真永
3 氷とく水を堤のすゑみえて　昌叱
4 絶々くるゝ橋の一筋　清安
5 月になる竹の葉分の里遠み　心前
6 砧の音は風のまに〳〵　英怙
7 玉鉾の行ゑや霧の隔らん　了玄
8 雨やとりしてをくれぬる友　宗仍
9 旅はたゝ独々の山超て　替世
10 しつかに鳥の打羽吹こゑ　宗住
11 雲薄く成つゝよはや明ぬらん　寂誉
12 名残おほかる手枕の夢　可生
13 涙猶はらひもあへぬさ筵に　昌左
14 外面は霜のふるさとの道　閑有

15 往来する人も稀なる野は暮て　宗圭
16 つなき捨たる舟そ方よる　巴
17 そよき立芦の末はや風ならし　永
18 秋を先しる柳いくもと　叱
19 出やらてほのめく月の霧の内　安
20 いつこの山のさをしかのこゑ　前
21 片岡の田つら遥に色付て　怙
22 夕々の霜のさむけさ　玄
23 尋行道もあらしの旅の袖　仍
24 おもふにたかふさとのかたはら　世
25 下萌も日毎に野へはみとりにて　生
26 春をもしらぬ沢水のをと　誉
27 消残る雪は流の白妙に　住
28 松一むらは遠き山本　左
29 行雲の跡もや風に晴ぬらん　有
30 いくつら雁の月に啼こゑ　永
31 みえつゝも短き夢の長よに　巴
32 うらみ露けき衣々の床　怙
33 問きてもあやな結へる中の帯　叱
34 何によりてか心をくらん　玄
35 親としも生あふこそえにしなれ　前
36 いさめをあたにおもふへきやは　安
37 出入も神のいかきは稀ならし　左
38 冬も木くらき月の杉村　巴

39 半天は時雨しまゝの山道に　永
40 をのつからにやとちこもる庵　住
41 まつしさの身はたゝ世にもうとまれて　叱
42 いとまあるこそ心やすけれ　生
43 ましはるも余多の中の宮仕　仍
44 何のねたみのかくつもるらん　前
45 つれなくも枕はちりにうつもれて　安
46 ふりぬる滝の底の岩かね　叱
47 散花の山ちや霧にまかふらん　玄
48 谷の戸出るうくひすのこゑ　怙
49 春もまたさす方分て寒日に　巴
50 所々のあさ霜のいろ　世
51 折残す枝やきのふの園の菊　叱
52 秋のこてふのやとりはかなき　巴
53 いにしへの笹（まがき）は霧のあらためて　前
54 せき入てみし水は冷し　安
55 うつろへる月はくまなき有明に　住
56 戸さしをもせすしたふ別ち　仍
57 おもふにはよしや人めも何ならん　永
58 かさゝは花にやつれしの袖　叱
59 さほ姫の衣はかすむ朝な〳〵　左
60 吹もしつけき春風の空　玄
61 こゑ消てあかるひはりは幽也　生
62 かけや夕日のをち方の雨　前

63 玉箔（すだれ）うこく緑の色深し　巴
64 竹は軒はに茂るすゑ〳〵　怙
65 山近きかけひの雫木伝て　仍
66 岩間〳〵もたまる初雪　左
67 行跡はかた斗なる道なれや　叱
68 ふきしも中にかくしたる草　巴
69 野守さへ〆あへぬ秋の花咲て　怙
70 霧につらなる袖の色々　生
71 あかてしも月にや帰る小たか狩　玄
72 片山きはそ暮ふかくなる　永
73 みる〳〵も嵐の木葉重りて　前
74 ゐせきにしるし河音の雨　叱
75 水遠きかたも返しや渡すらん　巴
76 春にはもれぬ陰の草村　有
77 あまねくも恵の露のゝとかにて　安
78 日はさやかにも立のほる山　住
79 かさこしの岑やふもとの今朝の雲　叱
80 友にはなれて村鴉啼　巴
81 江の水のすゑはる〳〵と晴渡り　左
82 松やすさきの白波のうへ　前
83 打なひく野ちのお花のほのみえて　永
84 虫のねえらふ夕暮の袖　仍
85 待わふる月に先立人や誰　生
86 あらぬなのりに扣（たた）く閨の戸　叱
87 忍ふるも宇治のわたりの宵過て　巴
88 ほとゝきすきくよとの川舟　怙
89 行かへりまこも刈日の五月雨に　安
90 一方ならぬ空のうき雲　世
91 山ひこや入相のかねをこたふらん　前
92 いらかは高きおくの古寺　玄
93 村竹の林さひしくうち煙　住
94 明はてぬまは見えし薄雪　巴
95 真木の屋の月によ寒の□□□□□　仍
96 かへに近よりなくきり〳〵す　左
97 跡はたゝ砌もおなし野分して　叱
98 かたふきなから松の木高さ　怙
99 花のえは老たる苺（こけ）も春の色　前
100 霞のうちの雨はるゝ比　誉

紹巴　十二　了玄　七　昌左　七
真永（別当）　七　宗仍　七　閑有　三
昌叱　十一　替世　五　宗圭　一
清安（三輪別当大智院）　七　宗住　六
心前　十　寂誉　三
英怙　八　可生　六

㊱　元亀二年八月六日　肥後御舟林中務少輔興行

山何

1　秋風の身を分て入袂かな　紹巴
2　花の香ふかき野ちの夕霧　守信
3　虫のねはむすふ枕の外ならて　藤孝
4　かりねの夢そ月に絶行　昌叱
5　山陰は明てもしはし残るよに　雅敦朝臣
6　時雨や木々の雫なるらん　心前
7　吹出る音もあらしの一とをり　麟圭
8　霞に遠き水の水上　英怙
9　さし下す小舟のとかに日は暮て　宗波
10　帰さいそく天津雁かね　運清
11　たゝ独旅の行ゑを思ひやり　禅永
12　したふ名残もかきりあらすや　松千代
13　又いつと契るとしらぬ心にて　信
14　近きたよりにとふはあた人　巴
15　ゆかりとてかこたるもこそあやなけれ　叱
16　世をいとひきておなし山住　孝
17　哀さはいつれかふかき苔（こけ）の袖　前
18　雨より後の松風の暮　敦
19　花に露心くらへも散初て　怙
20　霞を分る人あまた也　圭
21　方々に野はてふ鳥の打みたれ　清
22　明はなれ行月の遠山　波
23　ほのかなる芦間の舟の中にねて　巴
24　霧にこもれるともし火の影　永
25　誰袖の玉まつりして帰るらし　孝
26　けふの夕を頼世そ憂　叱
27　道絶る雪に薪の幽にて　圭
28　み谷かくれの遠き桟　信
29　河水の流の朝けうつる日に　敦
30　けふり吹やる風のむら竹　前
31　住とたに外にやは知草の庵　波
32　あかつきことのあらましのすゑ　怙
33　さひしさや木の間の月の影ならん　清
34　ふかき野守の道芝の露　巴
35　さをしかの霧の笹（まがき）に入立て　叱
36　つくり捨たる陰の山畑　孝
37　岩ほさへ崩かゝれる砠つたひ　前
38　みぬ滝おとす長雨の跡　叱
39　咲残る花は青はに顕れて　巴
40　春にもれたる軒のつま梨　孝
41　誰か里か霞む野原と成ぬらん　信
42　駒かふ程を休らへる袖　敦
43　法こそひかれもて行心なれ　波
44　身は宇治河に消かへる波　巴
45　床も猶雪ふかきよの網代守　怙

46 涼みあかせる月の片しき　前
47 よりそふもそむき〳〵の中はうし　永
48 言に出んもおもはゆき人　波
49 よしめくも齢の後は哀にて　孝
50 分るもいかにむはらからたち　圭
51 里遠き園をうさきの臥所　巴
52 おくまてつゝく山賤の道　怙
53 明ぬより柴つみ車音添て　叱
54 いく度ならし渡す河舟　前
55 七夕の契初てのけふことに　孝
56 うちはをかしの露の玉章　清
57 たのむるもかはる心を身にしめて　敦
58 あはぬ命をあき風の比　叱
59 なれもこそかなしき月の片うつら　信
60 あさちかるれは顕なるやと　巴
61 ふりそふる霜の小さゝの一村に　圭
62 さえ〳〵しよのけさの初雪　波
63 みよしのや超きて近き峰の雲　前
64 あらしも共にたきつ岩波　怙
65 朽はさへ春の氷にさそはれて　巴
66 折待えてや蛙なくらん　清
67 うちかへす田面の原の雨そゝき　波
68 あまりさひしき里の夕影　圭
69 宮仕いとまなき身を侘てきて　孝

70 ねたみあまたにある前渡り　敦
71 忘るゝも何の草はのさかならん　叱
72 はらふもまれの古塚の道　前
73 水かれし河へのあくた重りて　怙
74 鳰の浮すそ波に方よる　信
75 吹風のはけしさまさる五月雨に　永
76 山はいくへの雲うつむらん　巴
77 花盛天の原なる春にして　叱
78 月はおほろに明ほのゝ色　孝
79 うらゝにも枕をしやる閨の内　敦
80 乱れんすちのおしき落かみ　前
81 いつとなき物のけしきに面やせて　巴
82 しるしの帯も忍はてめや　叱
83 玉河や終のあふせを契る世に　孝
84 高野のおくやおもふあかつき　波
85 行ひの時をわきたるこゑはして　圭
86 絶す御かきをもるかたゝしき　信
87 あらためてうつせる神の宮所　前
88 日のかくるれは月よみのもり　巴
89 一葉つゝ涼しき露も落重ね　叱
90 ねくらもとむる秋の村鳥　敦
91 程もなく門田や冬に成けらし　清
92 野原にそよく竹のすゑ〳〵　怙
93 色なるもとき洗衣ほし置て　巴

94 つりをやめつゝ帰るうら舟　永
95 賢や身を世中に任すらん　信
96 うしろみからの人の行すゑ　前
97 をくれしも捨ぬ世とての姿にて　叱
98 残るうらみに又もそへけり　怙
99 花の枝はかへさしと思ふ文のうち　孝
100 とふも情のともなひの春　敦

紹巴　十三　心前　十一
守信　八　英怙　九
藤孝　十一　宗波　七
昌叱　十二　運清　七
飛鳥井 雅敦朝臣　九　禅永　五
高良山 麟圭　七　松千代　一

㊲　元亀三年七月十三日

何人

1 秋風の山口しるし荻のこゑ　紹巴
2 松の梢の月すめる影　宗作
3 玉垂に軒はの露の伝きて　昌叱
4 夕ふかむる袖の涼しさ　心前
5 さす舟のいくせの波にうつるらん　英怙
6 千鳥立行跡はるかなり　了玄
7 冴しよも明離たる空の雲　宗仍
8 吹よはるへきあらしともなし　但阿
9 春もまた打散雪の山かくれ　正磐
10 かた枝梅さく谷の戸の道　正継
11 日の影のさすや霞を分つらん　松千代
12 みとり添行水の一すち　巴
13 河上の雨はよの間の朝朗　作
14 流つゝきやけふる竹のは　叱
15 かすかなるむらの芦火は焼捨て　前
16 笹（まがき）のひまや絶ぬ夕風　怙
17 月なから露の小薄打乱れ　玄
18 消てはうつるいなつまの影　仍
19 うたゝねの覚る枕の身にしみて　阿
20 ともなふ程ははし近き袖　磐
21 立さらて詠る花のおはしまに　継
22 哀なれこし春の鳥のね　作
23 あら玉の年をいつまてかそへなん　巴
24 かりの住ゐも憂遠つ国　前
25 忍ひ出る都の行ゑ思ひわひ　叱
26 また明やらぬ関の戸の山　玄
27 杉村や木隠くらき空の月　怙
28 霧の雫の絶々の音　継
29 ふるもたゝけしきはかりの秋の雨　仍
30 夕になるもまたあつきのみ　阿

31 水上の日はさやかにも流きて　磐
32 氷くたくる早川のすゑ　巴
33 おもへたゝ身は萍のよるへなみ　作
34 床は泪のふり終るあと　叱
35 重ぬるもあらましかはのから衣　前
36 やつるゝまゝの旅はかなしも　仍
37 今日も猶やとりわかれぬ山超に　継
38 時鳥まつかた岳のみち　怙
39 むら雨は森の木陰の夕露に　巴
40 うつれは月も草のはの色　前
41 こもり江の所々は秋の水　叱
42 風のまゝなる霧はいくむら　磐
43 遠近の砧の音はかすかにて　玄
44 明はつるまて夢はみえこす　作
45 忘るなよ忘れはせしもいかならん　前
46 名をも使にもらす玉章　巴
47 契たゝあはぬさきより浅からて　仍
48 わか身のきえも花の春風　叱
49 時の間をねふるこてふの心かは　阿
50 霜のあさけも露かすむ跡　怙
51 旅人のわか草枕しき捨て　磐
52 はてはいつくのむさしのゝ原　玄
53 有明の月のいるさの影薄み　仍
54 山もとみれは冷しき雲　叱

55 ほのかなる芦分小舟こき出て　巴
56 すゑまて細き浜川の波　前
57 朽やらぬさほや五月雨みおつくし　怙
58 かきはあら田にたてる古槨（くい）　巴
59 つなき置綱手も里の離駒　叱
60 かへさの野へのくれふかき袖　継
61 雪をさへ峰の爪木にこりそへて　前
62 法にはつくす身をも思はし　阿
63 巻々を学残さは何ならん　作
64 しらへぬる音もたかふ四緒　仍
65 軒近き松にあらしの更々て　巴
66 板間添たるさむしろの露　前
67 舟とむる橋のかたへのよはの月　阿
68 雁鳴落る汀はるけし　怙
69 刈残す末の湊田色みえて　継
70 わつかになひく霜の下草　作
71 問くるも稀なる道の隠家に　玄
72 世を出はやもあらましにのみ　磐
73 みとりこはよはひの後の思ひにて　仍
74 をくれて誰に又ちきるへき　叱
75 うち山やしるへくやしきかたつ方　怙
76 いほりこそたゝ跡はかりなれ　玄
77 花守もあらぬ老木の陰淋し　巴
78 くるゝ霞にたてる松かえ　阿

79 大よとやのとけかりける浦の波　磐
80 あまたにうかふ海つらの舟　継
81 心とめて聞しやいかに鐘のこゑ　作
82 身の行すゑをおもふ暁　怙
83 かけ置もたのまれぬこそ命なれ　仍
84 あたにしもやは誓てし中　巴
85 あふくてふよにあひとの丶神慮（かみこころ）　叱
86 まことしあるを道とこそしれ　阿
87 雲晴る遠山もとの花にきて　前
88 うくひすさそふ月の明更（あけぼの）　磐
89 閑にも枕をしやる春の夢　玄
90 よ舟のかちそ波につれたる　叱
91 河水の干潟には猶顕れて　巴
92 入日の下のけふる一むら　継
93 松のはや時雨もあへすかわくらん　怙
94 しけきかしはに露かゝるをと　作
95 秋さむき閨はいさとく明過て　前
96 ぬきすへしたる衣手の月　巴
97 枕つく名残かなしき独ゐに　叱
98 いひもつくさぬ恨はかなや　仍
99 忍ふれはたかひの心まゝならて　磐
100 おやのいさめをおもふ度々　玄

紹巴　十三　　宗仍　十
宗作　九　　但阿　八
昌叱　十二　　正磐　九
心前　十一　　正継　八
英怙　十　　松千世　一
了玄　九

〈付記〉
本稿は平成三〇年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金課題番号：18K00286）の研究成果の一部をまとめたものである。貴重な資料の閲覧と翻刻許可を出して下さった国立公文書館に御礼を申し上げる。

（まつもと　あさこ／日本文学）